

松下村塾生の絆と自称詞〈僕〉—— 高杉晋作・久坂玄瑞・入江杉蔵を例として

友田 健太郎[†]

Emotional Ties among Shokason-juku Students and Self-reference Form *boku*—Takasugi Shinsaku, Kusaka Genzui, and Irie Sugizo as Examples

Kentaro Tomoda

1. はじめに

本稿は筆者の修士論文「対等な男子どうしの絆と幕末の政治運動——吉田松陰の一人称〈僕〉を通じて」をもとに、幕末の思想家・教育者吉田松陰（1830—1859）の身分の異なる三人の弟子たちの関係について記述するものである。

筆者の修士論文は、吉田松陰が愛用した自称詞〈僕〉の書簡における用法を分析したものである。〈僕〉は漢文由来の自称詞であるが、学問の場における対等の関係の男性どうしの間で用いられるものであり、厳格な身分社会であった江戸時代の日本において、共通の教養を背景に、対等の関係を成立させる効果があったと考えられる。吉田松陰はこの〈僕〉を、実兄である杉梅太郎（1828—1910）を始め、学問上の師匠・弟子、友人、知人、面識のない同志、長州藩の上役など様々な立場・身分の相手に対する書簡において用い、対等の同志関係を築いていった。アメリカ船への密航に失敗して以来、死に至るまで松陰は自宅謹慎や投獄の状況にあり、自由に出歩くことはできなかった。そのため、松陰の政治活動の多くは、こうした書簡を通じて自分の考えを相手に伝えることで行われていた。

その中でも、弟子との関係は重要である。松陰の主宰した松下村塾には九十二人の塾生がいたが^[1]、彼らのうち約半数が幕末の政治運動に参加しており、中には高杉晋作、久坂玄瑞など歴史上大きな役割を果たしたものが少なくない。彼らの相当数が幕末から明治初期の動乱の中で落命したが、生き残った者の中からは伊藤博文、山縣有朋の二人の首相を筆頭とする明治政府の顯官が出た。

長州という地方の一私塾に集まった青年たちには、特別なところはなかった。たまたま松下村塾の近所に住んでいたり、親戚・知人の紹介で入塾した例が大半である。その

彼らの多くが死の危険をも厭わぬ「志士」になり、戦火に飛び込んでいったのは、松下村塾という「まとまり」にそれだけの力があつたからであるが、それは何だったのか。吉田松陰という師の魅力に加え、その核に「身分を超えた男性どうしの、目的を共有する連帯」があつたことが挙げられる。そして、連帯を象徴し、促進・強化したものの一つとして、対等の関係を表す自称詞〈僕〉が考えられるのではないかと。本稿はこのような問題意識に基づいている。

松下村塾生には多様な身分の男性が含まれる。武士、中でも大組土と呼ばれる藩主側近の身分の子弟が三分の一近くを占めるが、それ以下の武士や、足軽・中間といった武士社会の末端に位置する人々も多く、伊藤・山縣は中間身分であった。他に藩主の家臣の家臣である陪臣、医者や僧侶のほか、少ないが町人の子弟もいた。

江戸時代は身分社会であり、身分により服装や生活習慣、言葉遣いも違っており、身分が大きく異なれば、親しく付き合うことは難しかった。武士社会の中でも、一人前の武士として認められる「士席班（士分）」と足軽以下の「卒席班（卒分）」の間の身分差は歴然としたものがあつた。

このような分断された社会において、松陰の弟子たちはどのように身分の差を超えて連帯していったのだろうか。

2. 高杉晋作・久坂玄瑞・入江杉蔵について

こうした多様な出自の弟子たちを代表する者として、本稿では高杉晋作（1839—1867）、久坂玄瑞（1840—1864）、入江杉蔵（九一）（1837—1864）の三人について取り上げ、彼らの関係について記述する。この三人はいずれも松陰が高く評価した弟子であり、松陰との関わりも深かった。

三人の中で最も身分が高かったのは高杉晋作である。生

[†] 2019年度修了（社会経営科学プログラム）、現所属：放送大学大学院博士後期課程（社会経営科学プログラム）

家・高杉家は、長州藩の大組士に属する。大組士とは「馬廻」ともいい、戦場では大将の馬の周りを固める役であり、藩の職制としても藩主側近であった。

大組士は家臣団の中で最上位ではなく、藩主の親戚や家老などが属する「上士」身分の下にあり、「中士」と言われるが、二百石の高杉家はその中で最上位に近い家格を誇った。高杉家は戦国時代からの毛利家家臣であり、代々、小姓、奥番頭など、藩主側近として重要な役割を果たし、萩の市中にそれにふさわしい広大な屋敷を構えていた。そのため藩内では石高や階級以上の存在感があった。晋作の父・小忠太も藩主側近を務める能吏であった。その嫡子・晋作も生まれながらにして藩主側近の座を約束されており、同い年の世子（次期藩主予定者）・毛利定広（1839—1896）とは友人とも言える近い関係であった。要するに晋作は、松下村塾における松陰の弟子の中で最も身分が高く、貴公子的存在であったと言える。

ちなみに松陰の生家杉家は無給通と言われる階級で「下士」と言われ、石高は二十六石であり、高杉家とは比べ物にならない低い身分であった。また、松陰が養子として入った吉田家は高杉家と同じ大組士であったが、持ち高五十七石であった。いずれにせよ、松陰は東北への脱藩行で士籍を取り上げられ、その後の生涯を父・杉百合之介の「育（はぐくみ）」（被後見人）として実家で過ごしたので、大組士としての意識は持っていなかったと思われる。要するに、松陰と高杉晋作の間には明確な身分差が存在した。

次に、久坂玄瑞の生家・久坂家は藩医で、持ち高二十五石であった。身分的には晋作の大組士の下「寺社組」に位置し、松陰よりも高いが、医者は武士社会では傍流であった。外見も頭を剃り上げる「僧形」が義務付けられており、玄瑞も死の前年まで僧形であった。

玄瑞は数え十五歳（満十三歳）の頃までに家族（両親と兄）を全て亡くし、天涯孤独となった。兄の友人たちの庇護を受け、知的に早熟な青年として成長するが、少年期に家族を失った打撃は大きかったであろう。

玄瑞は安政四（1857）年、松陰の妹・文と結婚する。松陰の義弟であることから、松陰死後は事実上の後継者として、塾生のまとまりの要に位置することになった。結婚に際し障壁がなかったことから見ても、玄瑞は総じて松陰と同格の身分であったと言っていいだろう。

三人目の入江杉蔵は、地方組中間という身分の出身である。中間は卒席班（卒分、卒族、軽輩など）と呼ばれる武士の下位身分の一つで、武家奉公人として馬の世話、門番などを務める人々である。卒席班に属する人たちは公式の場では苗字を名乗ることはできず、士分の人々からは武士の一員とは認められていなかった。いわば武士と庶民の間に属する人々と言ってもよいだろう。武家社会の末端であり、士席班の藩士の従卒や公用の飛脚など雑用係として働く。また、下級官吏として書類作成や様々な計算をすることも仕事のうちであった。

杉蔵の実弟は、野村和作（1842—1909）といい、やは

り松下村塾生であった。和作が養子に入った野村家は父の生家だが、入江家、野村家ともに貧しく、両家合わせて一つの小屋に身を寄せ合って暮らしていたという。写真が残っているが、掘っ建て小屋そのものである。兄と異なり、和作は生き残って明治を迎え、維新の功臣・子爵野村靖として駐仏公使、内務大臣などを歴任した。

杉蔵は嘉永二（1849）年に、父の病気のため、数え十三歳にして蔵元に出仕し、安政三年（1856年）には父の死で数え二十歳で家督を継いだ。少年時代から家計を支えるために忙しく働きながら懸命に学んだ。そうした過程で後の松下村塾生数人と行き来が生じ、「志ある」若者として松陰の耳にその名が入ったようである。

このように、高杉晋作、久坂玄瑞、入江杉蔵は長州藩の武家社会の中でそれぞれ上層、中層、最下層に属しており、相互の社会的距離は非常に大きいものであった。

3. 松陰の死まで [2]

3.1 杉蔵と松陰

三人の中で最初に松陰と接点を持ったのは久坂玄瑞で、安政三年（1856年）五月に手紙を書き送っている。松陰は嘉永七年（1854年）に下田でアメリカ船に密航を企て、入獄を経て安政二年（1855年）から実家の杉家で幽閉の身であった。玄瑞の亡兄の友人グループと松陰が近い関係にあり、お互いに名を聞き知っていた関係であった。この手紙のやりとりでは、過激な攘夷論をぶつ玄瑞を松陰がたしなめたことから二か月に渡る往復書簡となり、激論が交わされた。この手紙では〈僕〉が使われ、十歳の年齢差にも関わらず、書生どうしの対等の様式となっている。

松陰はこのころから杉家の幽室で教育活動を始める。玄瑞がどのように初期の松下村塾とかかわっていたのかは明らかになっていないが[3]、翌安政四年（1857年）の十二月には上述のように松陰の妹・文と結婚、身内となった。

高杉晋作は安政四年（1857年）八月までに松下村塾に出入りするようになったと言われる[4]。藩校の明倫館でもそれなりの成績を収め、身分の高さもあって傲慢な面もあったが、松陰は晋作に対して玄瑞を褒め、意識させるよう仕向けた。秀才タイプでなかった晋作は、古典や歴史に加え当時の政治情勢や国際情勢を学び、今後いかにすべきかを激しく議論する村塾での勉強を刺激的に感じたようだ。藩の中枢にあった父・高杉小忠太をはじめとする家族は、大事な跡取り息子が政治犯・松陰の下に出入りするのを警戒したが、晋作は家族が夜、寝静まってから抜け出すなどして通い続けた。このような晋作に松陰は大いに期待した。

入江杉蔵が松下村塾に初めて姿を現したのは二人よりかなり遅く、安政五年（1858年）七月であった。杉蔵が藩の飛脚として江戸から萩に戻った折であり、数日の滞在で江戸にとんぼ帰りした。その間、連日のように松下村塾に通い、高杉晋作らと意見を戦わせた。強い印象を受けた

松陰は、江戸に向けて旅立つ杉蔵に「吾れの甚だ杉蔵に貴ぶ所のものは、其の憂の切なる、策の要なる、吾れの及ぶ能はざるものあればなり」（杉蔵が素晴らしいと思うのは、国を憂う気持ちが切実で、策は要を得ており、私が及ばないものがあるからである）という敍（旅立ちを祝する文章）を送った[5]。

この時のことを杉蔵の立場から見てみよう。武士社会の末端に連なり、飛脚で江戸と萩の間を往復する任務に就いている自分が、高杉晋作のような藩の幹部子弟と同席し、意見を戦わせ、師からは賞賛の言葉を送られる。それまでの杉蔵の二十年余りの人生で、これほど晴れがましい出来事はおそらくなかったはずである。江戸へ向かう杉蔵の胸は、松陰と松下村塾の仲間たちへの熱い思いに満たされていたことであろう。振り返ってみればそれは、杉蔵の人生が決まった瞬間だったといえる。彼はその後、最晩年の松陰に最も忠実な弟子となり、師の死後は玄瑞・晋作の政治活動を補佐する役割を担うことになるのである。

杉蔵は当時江戸にいた玄瑞やその後来た晋作らと交流を持った後、十月頃に萩に戻り、弟・和作と共に、松陰の側で動き始めた。そのころ松陰は京都の公卿・大原重徳を萩に招いて討幕の旗印とする「大原西下策」、幕府の老中で勤皇派の取り締まりに従事している間部詮勝を暗殺する「間部要撃策」などのプランを進めていた。江戸の晋作・玄瑞を初め多くの弟子は計画を無謀なものと感じ、松陰と距離を置いたが、杉蔵は各方面への連絡役となるなど、忠実に松陰を支えた。

松陰の活動は長州藩政府にとって頭の痛いものであった。十一月末に松陰は自宅厳囚処分となり、さらに十二月五日には入獄を命じられた。その夜杉蔵はほかの七人の弟子とともに藩の重役の自宅に押し掛け、居座って師の処分理由を問いただした。そのため翌日、自宅謹慎を命じられた。

松陰自身は父親の病気の看病を願い出、入獄を暫時免れたが、いつまでも延期できるものではなかった。松陰は十二月八日、江戸留学中の高杉晋作に書簡を出し、「老兄早々御帰国の手段は之れなくや」と尋ねている。藩政府に顔の利く晋作の助けを求めたかったのではないと思われる。しかし晋作が帰ってくることはなく、松陰は十二月二十六日、野山獄に下った。

その間、杉蔵の弟の野村和作は松陰の指示に従い、京都で大原重徳との接触を図っていたが、藩政府に密告され、萩に帰されたあと、十二月二十八日に自宅謹慎となった。兄弟揃って謹慎となってしまったのである。杉蔵は謹慎中にも関わらず、和作の代わりに人材を京都に送り込むようにとの松陰の指示を実現しようと密かに出歩いたが、候補者に拒否された。

策の尽きた杉蔵は安政六年（1859年）正月九日、松陰に「已後勤王杯之事丸て申間敷と心得仕候」（今後、勤王などのことは一切口にしません）と、もはや松陰の説く「勤王の道」に従えないと述べた。「私兄弟内一人はいつれ

不孝不忠斃死に至り仕る可しと兄弟申合居申候母在る故候へはいつれ此任之有り候へは已後一人丸て天下国家之事口外仕る間敷と存居候」（私たち兄弟のうち一人はいつれ不孝不忠にも斃死してもよいと兄弟で申し合わせました。母親がおり、その面倒を見なければなりませんから、もう一人は天下国家を語らないつもりです）。中間身分の暮らしは厳しく、家族（母親と妹）もいる以上、兄弟二人がともに政治運動に奔走する余裕は到底なかったのである。

正月二十五日、兄弟は謹慎を解かれたが、和作はそれから一か月後の二月二十四日、松陰の指示に従い脱藩して京都に向かう。間もなく藩主・毛利敬親の江戸参府が予定されていた。松陰はこの時点で藩主が幕府に従って参府すれば討幕の機会をつぶすことになると考えており、伏見で藩主を説得し、京都に向かわせる計画を立てていた（伏見要駕策）。もともとは杉蔵がその役割に予定されていたが、杉蔵が入江家当主として家族の面倒を見るという考えから、和作がこれに代わった。

しかし、参勤の列を途中で止めようという大胆不敵な企てでは、反対する村塾生の一部から藩政府に伝わり、萩に残った兄杉蔵は二月二十七日、京都で藩邸に出頭した弟和作は三月二十六日、下獄した。結局二人とも捕まってしまったのである。兄弟が繋がれたのは、松陰が入獄していた野山獄ではなく、向かいにあった岩倉獄という百姓牢であった。野山獄は土席班以上の武士でなければ入れなかったためである。野山獄が独房であったのに対し岩倉獄は大部屋で、衛生状態は劣悪だった。衣食も自弁で、兄弟は母親が紡車で得た金で持ってくる食事で食いつないだ。また、筆耕（本の書き写し）でわずかな金を稼いで足しにした。

松陰は杉蔵の下獄直後の二月二十九日、書簡を送り、「足下獄に投ぜらる、豈に悲しからざらんや。然れども吾れ足下を悲しむこと久し、今は則ち喜ぶ」（あなたが投獄され、悲しいことだ。しかし、私はあなたのことを長く悲しんでおり、今は喜んでるのだ）と、驚くべきことに、杉蔵の投獄を歓迎する気持ちを書いた。それによると、杉蔵は不朽の大仕事を弟に譲ってしまったが、天はなお杉蔵を不朽にしようとして投獄の運命を授けたのだという。ただ母親は気の毒だが、「二子不朽ならば母も亦不朽なり」（二人の子供が不朽ならば、母親も不朽になる）という。

松陰は三月十一日、杉蔵・和作兄弟の母・満智子にも書簡を送ったが、「そもじ子供兩人ともに御気のどくの次第、拙者取計ひの宜しからざるにもあらん」（あなたの子供が二人とも捕まったのは気の毒で、私のやり方がよくなかったのかもしれない）と自分の責任を認めながら、「打返し相考え候得ばそもじ兩人の男子は皆御上の御ため又義理のために一命差上げ候得ば亡父へ御対し候ても御申訳は之有る事」（改めて考えてみると、あなたの二人の息子は藩主さまのため、また正義のために命を投げ出すのであれば、亡くなった父親にも申し訳は立つでしょう）などと、名誉に思えといわんばかりの書きぶりであった。

その翌日十二日にはまた杉蔵に書簡を送り、この時期安

否が不明であった和作がもし死んだら「僕と足下と萬生を偷むの義なし」(僕と君がおめおめ生きようとする理由はない)として死の覚悟を迫った。松陰によれば、杉蔵・和作兄弟は松陰とともに死んで「長門の三義死」として天下に唱えられるべきなのだという。松陰は兄・杉梅太郎宛の書簡(安政六年正月十三日付)でも、「此の上は是非杉蔵に一命を棄てさせたし」(こうなったら、ぜひ杉蔵に命を捨てさせたい)と書いたほか、同年二月十九日に義弟で友人の小田村伊之助に「安んぞ子遠(=杉蔵)輩数人の徒死を惜しまんや」(杉蔵ら数人が死んだところで、どうして惜しもうか)と書いている。この冷酷な言葉には、やはり身分の違いによる軽視があったように感じられる。

さすがにたまりかねたのだろう、杉蔵は「長門の三義死」の書簡を受け取った直後、三月十四日に返信して反論した。「先生は入獄を喜ぶべきだと言いますが、私は全く喜ばません。今は罪に問われ、ただ悔いるばかりです。日夜天に向かって号泣し、釈放されることを願っています」「以前、(私は)時事に感激し、憤死して太平の眠りを覚ますべきだと言ったことがあります、私には老いた母がいます。兄弟で話し合っただけは母の面倒を見ることになったのです。私は決して笑って死ぬことなどできないのです。それは(不孝という罪を犯し)天道に背くことになりまます。和作がもし死んだら、なおさら私は死ぬことはできません」「もし私の言うことが間違っていると言うなら、どうぞ絶交してください」(原漢文)。

この書簡で杉蔵は一貫して自分のことを「某(それがし)」と称し、丁寧な語調を崩していない。松陰が杉蔵への書簡で気楽に〈僕〉を多用するのに対し、杉蔵は松陰宛書簡で〈僕〉を使うことはあるものの、一通の書簡に一回程度と少ない。杉蔵も友人相手の書簡では〈僕〉を気楽に使っており[6]、それと比べると、松陰宛の書簡では言葉遣いに師への遠慮が感じられた。しばしば師に対してもぶっきらぼうな筆遣いであった高杉晋作と対照的である。

しかしこの書簡ではへり下りの中に断固とした主張が感じられる。自分たちの状況を理解しようともせず能天気「死」を求める松陰への憤りがあることは間違いない。

この返信は松陰にショックを与えた。松陰は、身分の低い杉蔵たちは自分の意思に従うのが当然だと無意識のうちに思っていたのだろう。しかし杉蔵にも自分の思いがあり、事情があるのだということ、つまりは自分と同じ人間だということ突き付けられたのである。

松陰という人物に何か偉大なところがあったとすれば、このような時に自分の誤りを認めることをためらわなかったことであろう。松陰は杉蔵への返信で「僕前言の失、悔恨何ぞ極まらん。忠臣孝子、人各々分あり。今後誓って子遠の孝を奪ひて之れに忠を強ひざるなり」(僕の前言の誤りを悔いています。忠臣・孝子、人それぞれの分があります。今後、誓ってあなたの母親への孝心をないがしろにして藩主への忠義を強いることはしません)と率直に反省の弁を述べた。また、これまで藩政府に杉蔵の釈放を求める

ようなことを一切しなかったことを弁明し、「成敗は天あり、僕願はくは力を尽さん」(うまくいくかはわからないが、尽力したい)と約束した。

結果としてこの出来事は師弟の絆を弱めるよりもむしろ強めた。安政六年五月、松陰の江戸送りが決まると杉蔵は「どうぞ虚なれ虚なれ実に落涙(中略)此様な難儀な事が有るものか」(どうぞ嘘であってほしい。涙が流れます。こんな酷いことがあるとは)(五月十三日付)と嘆き、松陰の出発まで毎日のように野山獄と岩倉獄の間を書簡が行き交った。五月十五日付書簡で杉蔵は「先生どふぞ尊攘堂の位牌に成給ふな」(先生どうぞ死なないでください)と別れを惜しんだ。松陰もまた、「足下若し吾れを惜しまば、久保・久坂と三人赤心相示せ。三人和協せば事憂えるに足らざるなり」(もし私を惜しむなら、久保清太郎、久坂玄瑞と協力しあってほしい。そうすれば心配する必要はない)と、松下村塾の中心スタッフである久保・久坂と共に、松陰が去った後の村塾を担う役割を杉蔵に期待した。

3.2 晋作と松陰

松陰や杉蔵・和作が過激な活動のために入獄するなか、高杉晋作は親に縛られ、政治活動に参加できないことを引け目に感じていた。晋作は安政六年三月二十五日、当時萩にいた玄瑞や中谷正亮らに書簡を送った。そこで杉蔵が入獄したことについて、「且憂、且恥申候。実に難有きやつに御座候」(心配し、また恥ずかしく思っています。なかなかいない奴です)と書いている。

続いて「私共実に諸君に申わけも御座無く候。獄にも入らず、国へも帰へされず、唯鉛槧書生にて送日候はば諸君に対し可恥之至、赤面之至、一言半句も御座無く候」(私は実に諸君に申し訳ないです。入獄せず、帰国せず、ただ、書生として日を送っており、諸君に対し恥ずかしく、赤面し、全く言い訳が立ちません)と苦しい気持ちを述べた。そして、「僕が口で慷慨いたし、行なう事は一つも出来ぬ姦物とか、こうかつ者とか、馬鹿とか」(僕が口で憤るだけで実際には何もできない卑怯者、狡猾な人間、馬鹿などと)思われるだろうが、「僕の難行事実を先づ申上候」(僕の苦しい事情を先づ申し上げます)として、自分の家庭事情を打ち明けたのである。

僕一つ之愚父を持ち居、其故日夜僕を呼付け俗論を申聞せ候。僕も俗論とは相考候得共、父の事故如何とも致方御座無く候。恥つ憂つ是迄諸君と御交申上候。猶亦先達死候大父(祖父)なども毎事僕呼よせ、何卒大なる事を致してくれるな、父様の役にかゝわるからと申付候故、松下塾へ参るさいもかくして居候くらい之事御座候。

(僕には一人の愚かな父がおり、日夜僕を呼びつけて俗論を聞かせています。僕も俗論とは考えますが、父の事なので、何とも仕方がありません。恥ずかしく、また残念に思いながら諸君と交わってきたのです。なおまた、先だって死んだ祖父なども何事につけて僕を呼び、

どうか大それた事をしてくれるな、お前のお父様の役職に関わるからと申し付けるので、松下村塾へ行く際もひそかに行っているぐらいなのです) [7]

名家に生まれた晋作は、もともと身分意識、特権意識の強い人物であった。晋作と村塾の仲間たちには、本来ならば気安く話をすることもできないぐらいの立場の違いがあった。晋作が「実に難有きやつ」と褒めた入江杉蔵に至っては中間身分であり、そもそも晋作のような高位の武士が同じ武士の仲間と見なしたり、まして友人になったりすることなど決してなかったはずの相手である。

しかし、村塾で共に学び、藩や日本の未来を巡って議論を交わしあう日々は、身分社会の高い壁を乗り越えさせた。そこに生まれた対等の関係を象徴するのが〈僕〉という一人称であった。晋作が村塾の仲間たちに、藩内で知らぬ者のない名家である自分の家の内情を切々と打ち明ける文章には、そうして築かれた友情への信頼と、だからこそそれを失いたくないという心情がうかがえる。

晋作は六日後の四月一日に、今後は久坂玄瑞だけに宛てて書簡を送った。そこでは久坂のことを「僕にはとても及ばぬ、頼むべき人と思ひ、兄弟之盟をも致度と、しよせん思ひ居候得共、是迄遂に口外不仕居候」(僕には到底届かない、頼りになる人と思ひ、兄弟の契りを結びたいと思っていました、これまで一度も口にできませんでした)と、久坂に熱い友情を感じていることを打ち明けた。

僕も一人の兄弟も御座なく常に心細く思ひ候くらいに御座候。夫故此節も読書などに倦み候節天下之事を安じ或は御国之事は如何んなつたかと思ひ候節貴兄之顔乎目前に看ゆる様に御座候

(僕も一人の兄弟もなく、常に心細く思っています。だから最近も読書などに疲れて天下の事を案じ、また御国(藩)の事はどうなったかと思う折りに、あなたの顔が目前に見えるように思います) [11]

晋作には妹が三人いたが、男兄弟はいなかった。勇猛果敢な豪傑のイメージがあるが、ここでは広大な屋敷に少年一人、孤独をかみしめ、周囲の期待に押しつぶされそうにして生きてきた晋作の一面がのぞいている。だからこそ兄弟のような親友を求める気持ちは強く、玄瑞はそんな気持ちにこたえられる存在と映ったのである。玄瑞はなかなか返事を出さなかったが、五月二十四日付の返信で「お言葉実に嬉しく、僕を未熟者と見なさず、兄弟のように言ってくださり、読んだ際、実にありがたく思いました」と書いた[9]。

安政六年五月、松陰が江戸に送られ、七月に小伝馬町の獄に入ると、江戸にいた晋作は中心となって救護の役割を担った。外部との文通は禁止されていたが、非公式の手段で頻繁に手紙が交わされ、獄を生き抜くために不可欠な金などの差し入れが行われた。松陰は書簡を通じ、晋作の相

談にも答えていた。中には「僕今日如何して可ならん」(僕は今どうしたらいいのでしょうか)とストレートに生き方を問うものもあった。

松陰と連絡を取り合う晋作の暴発を恐れた江戸の長州藩邸と国元の親たちによって帰国が決まり、晋作は十月十七日江戸を経た。松陰は十月七日付の書簡で「僕此の度の災厄、老兄在江戸なりしのみにて、大いに仕合せ申し候。御厚情幾久敷く感銘仕り候」(僕の今回の災厄は、あなたが江戸にいたおかげで、非常に幸運でした。ご親切にいつまでも感謝しています)と晋作の尽力に深く感謝した。

この時、松陰はまだ自らの死が迫っていることを知らなかった。しかし、晋作の江戸出発から十日にして、松陰は処刑された。晋作がそれを知ったのは、十一月十六日、萩に着いた時のことであった。

松陰と晋作の関係は、あくまでも二人の間の身分差を踏まえたものであった。松陰は高位の者に対する敬意を払って晋作に接していた。その一方で、晋作も師を慕い、生き方の指針を求めた。二人の書簡には共に心の秘密をさらけ出すような内容が見られ、その関係は深い共感と理解に基づくものであった。その意味において、身分差にもかかわらず、二人の関係はあくまでも対等なものであったと言える。師弟の間で飛び交った〈僕〉は、その本質的な対等性を示すものだったのである。

3.3 松陰の死

安政六年十月二十日、数日後の処刑を覚悟した松陰は、萩にいる弟子の中では唯一杉蔵に二通の書簡を送った。その一通には「日夜西顧父母を拝する外、先づ第一には足下兄弟の事を思ひ出し候」(日夜西に向かって両親を拝むほか、まず第一にあなたたち兄弟のことを思い出しています)「足下と久坂とのみを頼むなり」(あなたと玄瑞だけが頼りです)と杉蔵へ寄せる思いがつつられていた。またもう一通には「此の度吾れ一人死して大原(重徳)公並びに足下輩禍なきは天下の大幸なれば、足下輩も此の後の死所を御工夫然るべく候」(今回私一人が死んで、大原重徳公とあなたに壘が及ばなかったのは天下の幸いですが、あなたも今後の死に場所を考えるのがよいでしょう)と書かれていた。

松陰が同日に江戸にいた弟子(飯田正伯・尾寺新之丞)に送った書簡によると、松陰は江戸での調べに際し、彼の指示に従った杉蔵・和作らの名が口上書に残らないよう奉行に頼み込んだ。松陰はこのようにして、自分の死に杉蔵らを巻き込まないように努めた。杉蔵の生き方を尊重するという約束を守ったのである。しかし、同時に杉蔵に「今後の死に場所を考えるように」と言い残した。考えようによっては、自分の死に直接に巻き込む以上に、杉蔵に重い宿命を負わせたことになったとも言える。

4. 松陰死後の弟子たち

4.1 玄瑞と杉蔵の友情

松陰は江戸に護送される際、久保清太郎と久坂玄瑞に入獄中の杉蔵兄弟のことを託した。積極的に世話役を買って出たのは玄瑞であった。杉蔵と三歳年下の玄瑞の間をしばしば書が行き来するようになる。杉蔵は安政六年（1859年）九月二十三日付書簡で玄瑞に、「実に吾輩是迄は一事も為（なし）たる事なし。生残候はば、後年一度一踏込事を為す積り。今日は其肝錬より他事なし」（私はこれまで何も成し遂げたことがありません。生き残ったら、一度思い切ったことをするつもりです。今のそのために自分を鍛えるだけです）と書いた[10]。生き残ったら何かを成し遂げたいとの気持ちを吐露したのである。

これに対し、玄瑞は九月三十日付杉蔵宛書簡で「心術を鍛錬し生死を脱離する」ために陽明学を学ぶことを勧め、「老兄幽囚尚更力を経義に尽し、諸名士の跡を追ひ玉へよ。是僕之素願なり。（中略）老兄は何卒名教を維持すべし」（あなたは入獄中なので尚更儒教を勉強し、名士たちの後を追ってください。これが僕の願いです。あなたはどうか人の道を守ってください）と書いた。各学派の特徴や学者の名前を列挙したうえでの熱心な勧めは、杉蔵に響いたらしい。杉蔵は十月十五日付の返信で

僕へ王学の御勸有難く、僕尊意を諒し候。併し僕は迄は、経書は丸で手に取た事なし。僕小少より、経学先生が無益談をするのが、極々腹に合ぬ故、自らも決して其真似はせぬ積り。王学の事、僕の心に甚だ合たり

（僕に陽明学を進めていただきありがたく、僕はあなたの気持ちがわかりました。しかし僕はこれまで、儒教の本はまるで手に取ったことがありません。僕は小さい頃から、儒学の先生が役にも立たない話をするのが気に食わず、自分の決してその真似はしないつもりです。（だから、実践を重んじる）陽明学が僕の考えにはとても合いました）[11]

と書いた。政治に携わる望みのない卒席班の子弟の間では、支配者の哲学である儒学の勉強は一般的ではなかった。杉蔵がこれまで儒学を学ばなかったのは、そうした事情もあっただろう。それだけに秀才として知られる玄瑞に「名教を維持すべし」などと言われて面映ゆくも嬉しかったのではないだろうか。

杉蔵はこれまで、玄瑞宛書簡でも松陰宛と同様、〈僕〉を使うことは一通に一回程度と少なかった。ところがこの書簡の上記引用部分ではあふれ出るような勢いで〈僕〉を繰り返し使っており、玄瑞に心を開いたことがわかる。二人の青年の間で今まさに友情が花開こうとしていた。

玄瑞は藩政府にも杉蔵兄弟の釈放への働きかけを熱心に行っている。しかし、彼らが釈放されたのは、桜田門外の変（安政七年（1860年）三月三日）で松陰らを弾圧した

井伊直弼が殺害された後のことであった。

4.2 杉蔵の初期の志士活動[12]

一年余の入獄を経て赦免された杉蔵は、当初の予定通り家族を養って静かに生活しようと、仕事を探した。玄瑞も杉蔵の「潜伏」に賛成した。その年の九月には藩内の産物を江戸に運ぶ仕事に就き、十一月には江戸に到着している。それからしばらくは江戸で過ごし、大晦日には玄瑞と行徳に出かけ、翌文久元年（1861年）正月には一緒に相撲を見ている。二月末に帰郷する際には共に松陰の墓参りをし、久坂邸に二泊した。

杉蔵が玄瑞との関係が最も近かったことは明らかだが、滞在中の一月二十七日には、松陰の親友であった桂小五郎（後の木戸孝允）や他の塾生らと松陰の墓参りに行ったりもしている。塾生たちは毎月二十七日の月命日に松陰の墓参りをしており、江戸に出た塾生たちが結束を確認する機会になっていた。この時の墓参りに参加したのは大組士の桂、土屋（元来庶民であったが士として藩に雇われている身分）の時山直八、中間身分の品川弥二郎、伊藤利助（後の伊藤博文）、杉蔵、そして藩医身分の玄瑞であった。これほど幅のある身分の人々が対等の立場で一緒に行動したのだから、当時の江戸でも人目を引いたのではないかと。また、玄瑞の知人であった河本壮太郎（越後の医師で、翌年に坂下門外の変に参加）も参加しており、死後一年余にして、松陰が他藩の志士をも引き付けていたことを示している。

杉蔵は萩に戻った後、四月ごろからは高杉晋作の屋敷に連日通った。この頃、杉蔵以外にも数人の村塾関係者が屋敷に集まり、時事を論じていた。晋作の父・小忠太が出張でいなかったためでもあり、小忠太が帰ってくると集まりは他のメンバーの家に移り、晋作が江戸に発つ七月頃まで続いた。

杉蔵はその年の十一月に山中の岸見村の関門に職を得て、母・妹と官舎に移り住んだ。これは卒席班の者にあてがわれたささやかな仕事で、ようやく希望通り、家族と静かな生活を送れるようになったと思われた。

しかし、翌文久二年（1862年）になると、情勢がにわかに緊迫してきた。この頃、薩摩藩主の父である島津久光が兵を率いて上京することが決まった。志士の間では、これが尊王攘夷のためであると理解され、呼応して行動を起こそうという動きが活発になった。杉蔵も何度か萩に呼び出されている。志士活動への参加を打診されていたのかもしれない。謙虚な人柄ながら有能な杉蔵は、玄瑞や晋作に見込まれていた。結局三月の下旬に母に志士活動復帰の許しを得、そのまま京都へと向かった。

この頃長州や土佐などの志士は久光の上京に合わせて幕府の京都所司代などを襲撃する計画を建てていた。杉蔵は玄瑞らとともにこの計画に参加し、長州の京都藩邸で待機していた。ところが実際は、久光は過激な行動には反対であり、四月二十三日、伏見の旅館・寺田屋に集まっていた

薩摩藩の尊皇攘夷派志士を肅清してしまう（寺田屋事件）。玄瑞らの計画も当然中止となった。杉蔵はその後もしばらく活動を続けたが、八月には京都を去って帰郷、岸見関門の仕事に復職した。それからしばらく、杉蔵は家族と静かな生活を送る。

4.3 過激化する晋作と玄瑞

十一月ごろ、玄瑞は藩命で江戸に赴き、高杉晋作と合流した。晋作はそのころ、横浜で外国公使を襲撃・殺害する計画を建てていた。その計画を無謀だと批判した玄瑞と晋作の間に激論が交わされた。晋作は「久坂は漢籍の学力あるも、時勢を達観するの識力なく、頻りに迂愚の意見を吐露して、僕等今回の拳を阻止せんとす。故に僕は一刀の下に彼を打ち果たさんとす」（久坂は漢籍の学力があるが、時勢を見る力がなく、愚かな意見を述べて僕らの行動を阻止しようとしている。だから僕は刀の一振りだけで彼を打ち果たす）と息巻いて刀を抜いた。久坂も「斬り得れば即ち斬れ」（斬れるものなら斬れ）と応酬、一触即発の危機であったが、金策に走り回っていた志道聞多（後の井上馨）が止めに入り、結局は久坂も襲撃に参加することになった[13]。松下村塾生を中心に実行を目指したが、計画を知った世子・毛利定広らから止められ、中止となった。

しかし晋作や玄瑞の勢いは止まらなかった。「百折不屈、夷狄を掃除し、上は叡慮を貫き、下は君意を徹する」（不屈の精神で夷狄を掃除し、天皇や長州藩主の意思を実現することなどを謳った血盟書を作り、晋作・玄瑞を筆頭に松下村塾生や交流のある志士たちが署名した（御楯組血盟）。国元の同志にも回され、杉蔵の弟の野村和作も署名しているが、杉蔵は署名していない。志士活動からは身を引くつもりだったのかもしれない。

その後、十二月十二日には晋作・玄瑞を中心にした十数人のグループが品川に近い御殿山に建設中のイギリス公使館の建物を焼き討ちし、全焼させた。逃走した後彼らは芝浦の妓楼で燃え上がる建物を眺めながら酒を呑んだという。

4.4 杉蔵の志士活動の本格化

文久三年（1863年）一月、杉蔵は「吉田松陰に従ひ尊攘の大義を弁じ」たとして士席班に抜擢された。弟の野村靖（和作）は、この時のことについて、「かつて自分たちを蔑視した者がおべっかを言い、近づきたがらなかった者がやってきて、無沙汰を詫びた」という[14]。志士活動のため世間からつまはじきにされていた家族の喜びは大きかった。しかし、杉蔵にはその裏腹に、悲痛な思いを感じていた。祝宴の後、寝床で涙を流しているところを義理の祖母に見られた杉蔵は「阿嬢等ノ欣喜限ナキヲ見テ他日亦必ス悲嘆限ナカラムコトヲ思ヒ凄愴ニ堪ヘサルナリトテ再ヒ泣キ玉ヘリ」（お母さんがとても喜んでのを見て、今度はひどく悲しませることになるだろうと思うと痛ましく、耐えられないと言ってまた泣いた）[15]という。

士席班への抜擢は、志士活動を前提としたものであるこ

とが明らかであった。それまで家族への思いと志士活動との間で揺れてきた杉蔵だが、遂に母の下から離れ、志士活動に専念することを余儀なくされたのである。それは死の予感をも伴うものであった。

杉蔵は二月七日に結婚しその三日後には上京した。慌ただしい結婚は、おそらく自分が死んだ場合に養子を迎え、家の継続を図るためであっただろう。玄瑞が萩にいる妻・文に送った二月二十五日付の手紙には「九一（杉蔵）も此内上京先々力を得候こちいたしまいらせ候」（杉蔵もこの間上京してきて、力を得た思いだ）[16]とある。

上京した杉蔵は三月二十日ごろ、高杉晋作が何事かを決意して作った「血盟書」に率先して署名している。趣旨は明らかではないが、当時晋作は、京都にいた將軍・徳川家茂の襲撃を計画していたという[17]。長州藩政府が計画を危険視して晋作を帰国させたため、計画は実施されなかった。

將軍家茂は五月十日を「攘夷期限」として奏上した。既に通商が行われているなか、幕府としては尊攘派の志士たちの將軍暗殺の計画を含む運動の圧力もあって、しぶしぶ設定したものであったが、玄瑞・杉蔵ら松下村塾生を中心とする長州藩の志士たちは攘夷を実行しようとして下関に向かった。

玄瑞指揮下の彼らは下関の光明寺に駐屯、尊攘派公家の中山忠光を盟主とし、「光明寺党」と呼ばれた。五月十日には現地責任者の惣奉行の制止を無視してアメリカ商船を砲撃、二十三日にはフランス軍艦、二十五日にはオランダの軍艦を次々と砲撃した。玄瑞は戦果を朝廷に報告するために上京し、杉蔵は六月一日から惣奉行の軍議に参加するようになった。その日、アメリカ軍艦が報復のために来襲、長州の保有する数少ない軍艦のうち二隻を撃沈、もう一艦も大破した。また五日にはフランス軍に大敗した。

この危機に対応するため、藩政府は高杉晋作を起用。晋作は卒席班や陪臣など身分を問わずに起用する奇兵隊を創設した。杉蔵は奇兵隊でも最高幹部として遇された。晋作と杉蔵の関係について野村靖（和作）は

当時高杉ハ眼中人ナキ勢アリシモ家大兄（＝杉蔵）ヲ見ルトキハ則チ能ク其言ヲ容ル家大兄モ亦之ニ接スルニ懇切ヲ以テシ玉ヘリ蓋シ高杉ハ天質毫邁ニシテ識見自ラ高ク朝野ノ共ニ憚ル所ナリシニ家大兄常ニ之ヲ誡メ彼ヲシテ自ラ省ル所アラシメ玉ヘリ亦以テ家大兄ノ一世ヲ重ムゼラレ玉ヒシヲ見ルベキナリ

（当時高杉は眼中に人なき勢いだったが、兄の進言はよく取り入れた。兄もまた高杉に接する時は丁寧であった。高杉は豪快で識見が高く、誰もが遠慮していたが、兄は常に高杉に注意をし、反省させることができた。兄がどれだけ重んじられたかがわかる）[18]

と振り返っている。広壮な屋敷に育ち、代々藩政の中核に参画する一族の嫡子である晋作と、掘っ立て小屋で育

ち、わずか数年前には飛脚の役を務めていた杉蔵。二人の身分差を考えると、同志としての二人の関係には驚くべきものがある。

八月十八日、政変があり、長州藩は京都から事実上追放された。それからの杉蔵は、玄瑞の副官として、長州藩の京都復帰のために働くことになる。忙しい間を縫って十月には十日ほど萩に戻り、母たちと過ごす、これが家族との最後の時間となった。

4.5 玄瑞と杉蔵の最期

元治元年（1864年）、杉蔵は、前年の政変で京都を追われた長州藩が奪還を狙って挙兵した禁門の変に久坂玄瑞とともに参加した。七月十九日、玄瑞と杉蔵の部隊は堺町御門を守る越前福井藩との戦いに敗れ、鷹司邸に侵入、玄瑞はそこで自害を決意し、一方杉蔵は脱出して再起を図ることとなった。杉蔵の弟・和作（野村靖）は兄の部下であった河北義次郎の証言として、その時の様子をこのように書いている。

久坂将ニ君（＝杉蔵）ニ別レムトスルニ当リ悲憤ニ堪ヘズシテ数行ノ涙ヲ下セリ 君之（これ）ヲ見テ笑ヲ含ミ甲冑ノ間ヨリ一片ノ櫛ヲ取り久坂ニ向ヒ卿（＝あなた）ノ髪太（はなは）ダ乱ル僕謂フ之ヲ理（おさ）メムト

（久坂は杉蔵と別れようとするに当たり、悲憤の涙を流した。杉蔵はこれを見て微笑み、甲冑の間から櫛を取り出して久坂に向かい「あなたの髪はずいぶん乱れていますね。僕がとかしましよう」と言った）[19]

〈僕〉という言葉が結んだ親友に今生の別れを告げるとき、杉蔵が口にしたのもやはり〈僕〉であった。杉蔵は、玄瑞の髪をとかしながら何を思っていたのだろうか。玄瑞との友情に殉じ、家族との平穏な生活を捨てて死地に赴いたことを悔いたことはあったのだろうか。

その直後杉蔵は、裏門から槍を構えて呐喊、何人かの味方を逃がし、自分も脱出を図ったが、福井藩兵に眼を突かれ、落命した。数え二十八歳であった。

4.6 その後の晋作

晋作は玄瑞・杉蔵の死後、三年足らずを生きた。禁門の変により長州藩は朝廷・幕府から追討される立場になり、藩内でも幕府に恭順を誓おうとする保守派が台頭したが、晋作は不利と見るや藩外に逃げるなど大胆な行動力を発揮しながら、局面を打開していった。その際に軍事力として頼りにしたのは村塾生を中心に、御楯組血盟→光明寺党→奇兵隊とつながってきた志士の人脈であり、中核をなすのは卒席班出身者である伊藤利助（博文）、山縣狂輔（有朋）、野村靖之助（和作）、品川弥二郎らであった。

しかし、それは晋作が身分意識、特権意識を完全に捨てたということではなかった。元治元年（1864年）十二月、幕府に恭順する方針の藩政府に対抗し、晋作は奇兵隊

などの諸隊を挙兵させようとした。それに対し、当時の奇兵隊総督であった村塾出身の赤根武人は藩政府との話し合いを主導していた。その時晋作は「そもそも武人は大島郡の一土民のみ、何ぞ国家の大事、両君公（＝藩主と世子）の危急を知るものならんや。君等は予を何と思ふや、予は毛利家三百年来の世臣なり、豈武人が如き一土民の比ならんや」（武人はただの大島郡の土民ではないか。どうして国家の大事や藩主・世子の危急がわかるだろうか。君らは自分を何だと思うのか。自分は毛利家三百年の代々の家臣だ、武人のような一土民とは比べ物にならない）と酒の勢いも借りて自らの家柄を誇った[20]。

赤根武人は陪臣の養子として侍身分を獲得していたが、もともとは周防柱島の村医者、つまり民間の医者の子であり、百姓身分だった。その場は村塾出身の諸隊幹部が多くいたが、しんと静まり返り、晋作の説得に乗る者は誰もいなかったという。

時にそうした強烈な身分意識・特権意識を発揮すること、村塾の仲間と〈僕〉を使って対等に意見を交わしあうことは晋作においては矛盾しなかった。政治的にも社会的にも大きな過渡期にあった幕末維新时期には、身分に関する様々な意識がグラデーションを描きながら変容していった。高杉晋作という一人の人物を見ても、時と場合によって様々な意識が混じりあった形で見られるのである。

晋作は慶応三年（1867年）、結核で世を去った。数え二十九歳での死であった。

5. まとめ

江戸時代の身分社会が明治以降の近代的な社会に移行するにあたり、いわゆる「四民平等」などの脱身分化が行われたが、それは決して唐突に行われたわけではなかった。その背景には、江戸時代を通じ、学問などの場における身分にこだわらない男性どうしの関係が持たれ、それがしばしば藩をも超えて全国的なネットワークをなしていた事実があった。明治維新の過程ではそのネットワークが活性化し、下級武士層を中心とする志士活動となって現れた。中でも吉田松陰による松下村塾党はそうした志士活動の一つの中心であるが、そこでは身分を超えた男性どうしの同志関係がメンバー間の絆を強めていた。〈僕〉という自称詞は、そうした関係を象徴し、しばしば促進・強化する働きを持って使われていたことが、本稿で扱った三人の志士の関係を見ることで分かるのである。

注

- [1] 松下村塾生の人数や身分などは、海原徹『吉田松陰と松下村塾』（ミネルヴァ書房、1990）120-123頁に依った。
- [2] 吉田松陰の死までの松陰や弟子たちの伝記的な事実については、海原徹著『吉田松陰——身はたとひ武蔵の

野辺に』(ミネルヴァ書房, 2003)を中心に, 様々な伝記・歴史書に依っている。

- [3] 一坂太郎 (2019) 『久坂玄瑞——志気凡ならず, 何卒大成致せかし』(ミネルヴァ書房, 2019) 48頁
- [4] 青山忠正 『高杉晋作と奇兵隊 (幕末維新の個性7)』(吉川弘文館, 2007) 25頁
- [5] 松陰の文章や書簡, それへの弟子たちの返信は山口県教育会編 『吉田松陰全集』(岩波書店, 1936) と山口県教育界編 『吉田松陰全集』(大和書房, 1972) を参照した。現代語訳は筆者による。
- [6] 入江遠編 『入江九一資料集』(楽, 1994) には友人相手に〈僕〉を使用した書簡が多く掲載されている。
- [7] 一坂太郎, 道迫真吾編 『久坂玄瑞史料』(マツノ書店, 2018) 114頁。現代語訳は筆者。
- [8] 同上書123頁
- [9] 同上書136頁
- [10] 同上書157頁
- [11] 同上書167頁
- [12] 杉蔵の動向は入江編 『入江九一資料集』によった。
- [13] 中原邦平編述 『井上伯伝 卷之一』(中原邦平, 1907) 75-76頁
- [14] 野村靖 『追懐録 (復刻版)』(マツノ書店, 1999) 29頁
- [15] 同上書29頁
- [16] 一坂, 道迫編 『久坂玄瑞史料』 513頁
- [17] 青山 『高杉晋作と奇兵隊』 126頁
- [18] 野村 『追懐録 (復刻版)』 33頁
- [19] 同上書40頁
- [20] 天野御民 「長州諸隊略歴」(日本史籍協会編 『野史台 維新史料叢書 37 (雑5)』(東京大学出版会, 1975))